

## 鎌倉版について

納 富 常 天\*

## On Wood Block Printing, in the Kamakura Period

(With 2 figure)

Jōten Nōdomi

ここでいう鎌倉版は、鎌倉およびその周辺において刊行されたものをいうが、本稿では時代を鎌倉時代から南北朝時代までに限定し、金沢文庫資料を中心として述べることにする。

金沢文庫が所蔵している古書(国書・漢籍・仏典)中には、宋版・春日版・東大寺版・西大寺版・奈良版・高野版・泉涌寺版・醍醐寺版・相州靈山寺版・鎌倉極楽寺版・五山版などがあるが<sup>(1)</sup>、この中には相州靈山寺版・鎌倉極楽寺版・鎌倉五山版など、鎌倉を中心として開板されたものが多く含まれている。これら鎌倉における開板については、すでに大屋徳城氏「寧楽刊経史」「金沢遺文」「寧楽仏教史論」、木宮泰彦氏「日本古印刷文化史」、吉沢義則氏「日本古刊書目」、熊原政男氏「金沢文庫書誌の研究」(金沢文庫研究紀要第一号所収)などにおいて研究がなされ一応の結果は出されているが、今一度ここで反省し、多少独断に走る嫌いがあるかも知れないが私案を提示し、印刷文化を通じて、鎌倉文化の趨勢を探ってみたい。

まずはじめに遺品や管見する限りにおける文献などから、南北朝時代までの鎌倉を中心とした関東における開板事業を表示すると次のとおりである<sup>(2)</sup>。

西暦	開板時期	開板典籍	開板者	典拠
1200	正治2年1月13日	五部大乘経		吾妻鏡 兜木正亨法華版経の研究
1225	嘉祿元年5月22日	般若心経・尊勝陀羅尼		吾妻鏡
1236	嘉禎2年8月19日	梵網経菩薩戒本	上野国新田莊長楽寺隆円	日本古刊書目
1237 1239	嘉禎3年— 延応元年	大仏頂首楞嚴経	"	"
1244	寛元2年6月4日	法華経 <sup>(3)</sup>	源頼経(願主)	吾妻鏡
1251	建長3年3月9日	" <sup>(4)</sup>		"
1258	正嘉2年7月1日	孟蘭盆経疏新記	相州靈山寺住持安海	大東急記念文庫蔵同書刊記
"	"	仏説孟蘭盆経疏科分 <sup>(5)</sup>	"	金沢文庫蔵同書刊記
1265	文永2年以前	兀菴禅師語録	建長寺兀菴普寧	日本古印刷文化史
1273	"10年4月8日	菩薩戒本(瑜伽戒本)	相州極楽律寺玄観	金沢文庫蔵同書刊記

\* 金沢文庫

西暦	開板時期	開板典籍	開板者	典拠
1275	建治元年7月日	孟蘭盆礼文	鎌倉極楽寺忍性	律宗戒学院蔵同書刊記、寧楽刊経史
1277	" 3年以前	法華経(6)		称名寺弥勒本尊胎内第一回奉籠品
1281	弘安4年10月日	大乘本生心地観経	鎌倉極楽寺忍性	金沢文庫蔵同書刊記
1279 1284	弘安2年—7年	円覚了義経(7)	北条時宗	仏光国師語録巻六
1283	" 6年2月日	伝心法要(8)	鎌倉寿福寺大休正念	東洋文庫蔵同書刊記
1284	" 7年	大休念禅師語録	"	日本古印刷文化史
1287	" 10年5月	禅門宝訓集	建長寺正統菴古倫	日本古刊書目
"	" 9月	伝法正宗記(9)	相州靈山寺宝積寂慧	金沢文庫蔵本および大東急記念文庫蔵同書刊記
—	この頃	華嚴経(10)	"	金沢文庫蔵同書刊記
1297	永仁5年4月	大乘起信論義記(11)	(松谷寺)智照	金沢文庫蔵同書目 日本古刊書目
1302	正安4年正月	四分律注比丘尼戒本(12)	(鎌倉極楽寺)栄真	金沢文庫蔵同書刊記
1303	嘉元元年	大般若波羅蜜多経	鎌倉極楽寺忍性	忍性行状略頌
"	"	人天眼目	浄智寺桂堂瓊林	新纂禅籍目録
"	"	虚舟録	"	"
1315	正和4年	禅居集	建長寺正統庵妙霖	日本禅宗年表、新纂禅籍目録
1322	元亨2年10月22日	金剛経・法華経開結二経 般若心経・阿弥陀経		鎌倉市史史料篇 第2・69号
"	" 26日	円覚経・首楞嚴経・維摩経		"
1331	元弘元年	来々禅子集	建長寺竺仙梵僊	日本古印刷文化史
—	南北朝初期	一切経(印板)(13)	松谷寺智通	金沢文庫古文書 5432号
1344	康永5年	夢中問答	下野足利行道山浄因菴	日本古印刷文化史 日本禅宗年表
1347	至正7年7月	雪峯外集	建長寺	日本古印刷文化史 日本禅宗年表
1351	観応2年5月24日	一切経(印板)(14)	松谷寺解一	鎌倉市史史料篇 第3・283号

西暦	開板時期	開板典籍	開板者	典拠
1354	文和3年	法華經		金沢文庫古文書 6056号
—	貞和・観応頃	仏光国師語録	建長寺正統庵妙霖	日本古印刷文化史
1363 1387	貞治2年8月6日 至徳4年	華嚴經・大集經（五部大乘經）	武州立川普濟寺	中世武蔵国における典籍の開板（仏教史学第2号所収）
1374	応安7年以前	金剛般若波羅蜜經	円覚寺統燈庵（法忻）	日本古印刷文化史
1377	永和3年	〃	円覚寺恵従	〃
1385	至徳2年	八方珠玉集	円覚寺	〃
—	、 —	梵網經 <sup>(15)</sup>	称名寺湛睿か	金沢文庫蔵

以上に掲げた開板事業の実態を通覧し、性格的に三種類に大別されることがわかる。すなわち南都仏教の影響特に西大寺門下による開板、宋槧本の流入および禅律僧の来往による開板、以上の二類に入らないその他の開板である。このように鎌倉を中心とした開板事業隆盛の原因は、鎌倉における仏教の盛行、京都文化の移入、経済の発達などを挙げることができよう。

まず鎌倉における仏教の盛行は、鎌倉が社寺繁昌の都市といわれる<sup>(16)</sup>ように、鎌倉開府と共に旧仏教は勿論、新しく発生した鎌倉仏教、さらには復興なった南都仏教など、凡ゆる仏教が鎌倉に進出し、蘭菊の美を競った。就中南都仏教および日宋交通により新たに中国から伝来した禅宗、特に帰化宋僧が開板事業に密接な関係を持った。南都仏教の鎌倉進出は、源頼朝の東大寺復興を契機として行なわれ、特に西大寺叡尊の鎌倉教化——西大寺流の関東一円における教線拡張——は他の華嚴を始めとする南都教学の関東進出を促進した<sup>(17)</sup>。このような南都仏教の鎌倉進出は、南都における開板技術を鎌倉へ導入せずにはおかなかった<sup>(18)</sup>。したがって少なくともその初期における開板は、南都から直接招かれた雕工の手によりなされたものと思われ、その版式なども春日版・西大寺版・東大寺版など、所謂南都版の様式を備えたものであった。

また一方日宋交通により宋朝文化の流入が盛んになり、入宋する禅律僧が多くなるにともない、蘭溪道隆・兀菴普寧・大休正念・無学祖元・一山一寧・西澗土曇・東明恵日など多くの宋僧が来化して、鎌倉の諸大寺を薫じ、大いに禅風を鼓吹した。このような禅僧の来往はまた宋版一切経をはじめとする多くの宋槧本を将来することになった。これらの宋槧本の流入、さらには禅宗の興隆は、語録・僧伝・詩文集を中心とした禅籍の開板を促した。このような経緯により開板されたものが所謂の五山版で、その版式などは宋槧本の様式を備えたものであった。

次に京都文化の移入<sup>(19)</sup>により、古くから貴族社会に行なわれた摺供養の儀礼が鎌倉に流入した<sup>(20)</sup>。この摺供養は平安中期の天台系統における開板事業の主流をなし、追福供養と延命息災を祈願するものであった。そして追福供養には主として法華經・無量義經・観普賢經などが、延命息災には寿命經・薬師經などが摺写の対象とされた。鎌倉においても吾妻鏡などにより五部大乘經・般若心經・尊勝陀羅尼・法華經・円覚經などの摺写が行なわれていることが知られる<sup>(21)</sup>が、これらは凡て摺供養の意味における開板事業であった<sup>(22)</sup>。

以上述べたように鎌倉における開板は、南都版を基盤としたもの、宋槧本を基調としたもの、さらには摺供養を中心とした天台系統の流れを汲むものの三類に大別することができる。そしてこの

三者における開板の対象となったものを比較してみると、全く相異していることが知られる。すなわち南都版を基盤としたものが、戒律を中心とした経論章疏であるのに対し、宋槧本を基調としたものは、禅が参禅学道を旨とするため、その対象となったものは経論章疏ではなく、祖師の行履を記した語録を中心とする僧伝・詩文集などの禅籍であった。この前二者が主として僧徒養成のための教科用であったのに対し、天台系統における摺供養の対象となったものは、法華経を中心として円覚経・尊勝陀羅尼・五部大乘経など、寺院における経巻の転読用であった。

次に鎌倉における経済の発達、鎌倉における開板事業を充分支え得るまでに発展成長したものであると思われる。鎌倉はいままでもなく、鎌倉開府による武士の集中居住が、都市構成の中核であった。これら武士階級の需用に応じて商人工人などが移住し、武士邸宅の周辺に住みついた。このようにして中世の都市鎌倉は形成されるが、その盛時における鎌倉は人家が稠密し<sup>(23)</sup>、貨幣流通と相俟って経済の発達も著しいものがあつた。特に寛元三年の五ヶ条の禁制以来、しばしば商人および商店の制限を加えている<sup>(24)</sup>が、これらは鎌倉の経済が著しく発達したことを裏書きするものである。

このように仏教の盛行、京都文化の移入、経済の著しい成長による、開板事業の発達は遂に一切経印板をも鎌倉に蔵することになった。これは

松谷一切経板事為興隆云現在分云欠口相副本新目錄委細可注給候謹言

十月五日

左兵衛督 花押(直義)

智通上人御房

一切経印板同経蔵等事任智通上人之例可被致沙汰之状如件

観応二年五月廿四日

花押(直義)

解一上人御房

とある二通の足利直義の御教書<sup>(25)</sup>から、松谷寺に一切経印板と同経蔵があつたこと、智通から解一へ引継がれたこと、さらには足利直義に松谷一切経板興隆の意志があつたことなどが知られる。

この松谷寺は凝然(1240—1321)の高足で、東大寺戒壇院系の華嚴を最初に関東に伝来し、その育成発展につとめた智照が活躍し、鎌倉時代から南北朝時代を通じ、華嚴教学の一拠点であつた<sup>(26)</sup>。そして永仁五年には智照により大乘起信論義記の開板がなされている<sup>(27)</sup>。

このような背景をもつ松谷一切経印板同経蔵は、東福寺普門院における「普門院造作并院領等事<sup>(28)</sup>」に

経蔵一字 円爾造之納内外典書籍等

印版屋一字 本智房造之

とあるものに比肩して考えることはできないだろうか。すなわち印版屋一字とあるのは、模版を収蔵した倉庫か若しくは印刷所とされているが、松谷寺の場合においても、一切経印板を収蔵する建造物が必要であつたらうから、その建造物が印版屋に相当すると考えられる。そして普門院における印版屋があるいは専門の印刷所であつたとも考えられるように<sup>(29)</sup>、松谷寺においても、一切経印板を収蔵する建造物自体、また専門の印刷所であつたとも考えることができよう。このように南北朝初期には、既に専門的な印刷所が存在し、組織的刊行が行なわれていたことを予想させるまでに、鎌倉の開板事業は発展盛行したことが知られる。

以上において鎌倉における開板事業を概観したが、次には鎌倉版における二・三の問題——(イ)靈山寺版華嚴経・伝法正宗記 (ロ)極楽寺版四分律注比丘尼戒本 (ハ)その他の鎌倉版大乘起信論義記・称名寺本尊弥勒菩薩胎内奉籠法華経・梵網経など従来鎌倉版とされていかなかったものを中心として——について述べる予定であつたが、紙数の関係で到底不可能であるから、要点だけを註として掲げ、詳しいことは次の機会にゆずりたい。

(1965年1月稿)

以無性故一切法平等二以無相故一切法平等三以無生故一切法平等四以無滅故一切法平等五以本來清淨故一切法平等六以無戲論故一切法平等七以不取不捨故一切法平等八以融故一切法平等九以幻夢影響水中月故一切法平等十以有無不二故一切法平等菩薩以是十平等法得入第六地菩薩如是觀一切法性能志隨解得第六地無生法忍雖未現前心已成說明利順忍是菩薩觀一切法如是相大悲為首增長大悲故觀世間生滅相作是念世間所有受身生處皆以貪著我故如離著我則無生處一切凡夫常隨邪念行邪妄造惡業所昏貪著於我習起三行罪行偈行不動行以是行故起有漏心種子有漏有取心故起生死身所謂業為地識為種子無明覆蔽受水為潤我心漸灌種種諸見令得增長生名色才因名色故生諸根諸根合故有觸從觸生受樂受故生愛愛增長故有取取因緣故有有於有起五陰身名為生五陰衰變名為老五陰滅名為死老死因緣有憂悲熱惱樂若聚集是十二因緣無有集者無有散者緣合則有緣散則無苦盡是於六地中隨順觀

經嚴華版靈山寺達書容湛

得沒實不得又曰汝既不得云何言得答曰汝有我故所以不得我無我故我當自得於是外道詞屈自相謂曰此必大聖宜皆歸之遂問曰汝名為誰大士曰我名迦那提婆外道輩以夙聞其名於是服膺悔過其未即化者後發百千難問而大士恣其無礙之辭一皆折之由是廣造論議若百論之類是也然其勝事既集終命羅睺羅多付之法眼其說偈曰  
時五百人  
 本對傳法人 為說解脫理 於法實無證 無終亦無始  
 已而入奮迅三昧體放八光而趣寂滅其時當此前漢孝文帝之世也四眾營塔而梵天助飾共供養之  
 天竺第十六祖羅睺羅多居士傳  
 羅睺羅多者迦毗羅國人也姓梵摩氏既得明其家木耳之緣即從提婆大士出家隨侍往巴連弗城尋受付正法於彼城其後大士

記宗法傳版靈山寺

- (1) 金沢文庫古書目録による。
- (2) さらに詳細な文献渉猟を行なった場合、多くの開板がなされていると思われる。
- (3) 「此形木即所被彫彼（後鳥羽院）震筆也、仍今日被逐供養」とあり、形木すなわち板木の供養が行なわれているが、法華経の摺写は当然行なわれたものと思われる。
- (4) 「今日相州於御第被供養法華経形木云々」とあり、法華経の摺写は当然行なわれたものと思われる。
- (5) 金沢文庫古文書識語篇では刊記が正嘉三年になっているが、正嘉二年が正しいから訂正しておく。
- (6) 刊記はないが称名寺本尊弥勒菩薩胎内第一回奉籠品であり、書風は極楽寺玄観開板にかかる菩薩戒本と非常に類似し明らかに鎌倉版であることが認められる。多分実時室あたりの奉籠ではなからうか。
- (7) 大日本仏教全書 95 卷 283 頁下に「太守今晨為<sub>二</sub>開山大覚和尚遠忌之辰<sub>一</sub>。雕<sub>一</sub>造如来聖像。雕<sub>一</sub>刊円覚了義経。命<sub>一</sub>山野<sub>一</sub>普説云々」とあり、北条時宗が建長寺開山蘭溪道隆の遠忌に際し、円覚経を開板し、無学祖元に命じて普説せしめたことがわかるが、祖元の来朝は弘安二年（1279）で、時宗は弘安七年（1284）に没しているから、開板はその間に行なわれた。
- (8) 本書は金沢文庫にも所蔵しているが残念ながら刊記の後半が散佚している。
- (9) 大東急記念文庫蔵命良甫版は、調査の結果刊記・版式などから靈山寺版の覆刻であることがわかった。また靈山寺版は胡蝶装であるが、一板三十六行、一行十七字、五折六行本の宋版一切経（折本）と版式が同じく、また書体からもその覆刻であることが知られる。金沢文庫本には刊記のある巻十が散佚しているから、命良甫版によった。
- (10) 金沢文庫には三部（卷子本・蓮如施入本・湛春書込本）が所蔵されているが、書誌学的には各々初摺本・次印本・後摺本に属しており、皆施財者の刻銘があるが、三本共相互に出入りが認められる。この施財者名は刊行地靈山寺の場所を究明するもっとも有力な資料と思われる。また中国・日本を通じ他の二訳と比し六十卷華嚴経が思想的にもっとも大きな影響を与えたが、これが鎌倉地方において開板されたことは、鎌倉における華嚴学研究の上に大きな意義をもつものである。
- (11) 従来東大寺版とされているが、開板期が智照関東下向（正応二年三月十二日が初見）より少なくとも八年を経過していること、金沢文庫に四部（金沢文庫古書目録では三部一何れも刊記の部分なし）を所蔵していること。また智照が活躍した松谷寺は南北朝初期には一切経印板を蔵していたことなどから、あるいは松谷寺あたりで開板されたものではなからうか。
- (12) 大屋徳城氏「金沢遺文」に宋槧覆刻の西大寺版となしているが、本書を撰集した総持の序に「予按南山律師撰集録僧尼並有含注戒本僧戒見行尼本未傳開遮輕重誠為冥然（中略）今試依<sub>二</sub>律本<sub>一</sub>具録<sub>一</sub>正經<sub>一</sub>仍隨<sub>一</sub>仏解<sub>一</sub>重加<sub>二</sub>子注<sub>一</sub>（中略）管見之識乖<sub>一</sub>于聖意<sub>一</sub>外聞有<sub>一</sub>憚云々」とあり、総持が撰集したことが知られる。したがって宋槧本の覆刻ではなく少なくとも西大寺版である。しかし刊記の「此注尼戒本令彫印板志近訪慈母之冥路遠助尼衆之行化（中略）于時正安第四<sub>十</sub>曆孟春正月 日比丘榮真」の部分のみ書風が違っていること、榮真は開板期より少なくとも十二年前に関東（総州願成寺か）に下っていること、さらには開板の翌年には忍性の後を襲い極楽寺二代長老となっているから、極楽寺における開板は容易であったと思われること、さらに関東往還記裏書にある「大仏尼寺」を始めとして金沢文庫古文書第 2178・4491・5150 号および識語篇 1014 号などから鎌倉を中心とした関東一円における比丘尼の活躍が推察され、戒律研究の上からも比丘尼戒本の注釈書が必要であったと思われることから、あるいは西大寺版を覆刻したものと思われる。
- (13)(14) 一切経印板とあり摺写の記録はないが、印板がある限りにおいては摺写されたであろうから、ここに掲載した。なお一切経印板とあるも周囲の事情から全部揃ったものではなかったらうと思われる。
- (15) 紙背に東大寺凝然と称名寺二世釵阿の消息をもつ消息経であるが、これの開板者は消息の文意・対人関係などから湛容がもっとも相応しく、その開板期は釵阿没後と思われるから開板地は鎌倉であろう。
- (16) 鎌倉市史総説篇 333 頁参照。
- (17) 拙著「鎌倉の教学」5 頁参照。
- (18) 西大寺叡尊門下の忍性・榮真、さらには東大寺の流れを汲む智照などの開板はその結果なされたものと思われる。
- (19) 吾妻鏡などにより公卿の幕政参与・親王将軍の擁立を始めとして、僧侶・文学者・鞠師範・仏師工匠・医師・舞人・楽人・陰陽師などが鎌倉に下っていることが知られる。
- (20) 仏教では經典書写による功德の広大なことは、多くの經典に説かれているが、我国でも奈良朝以来供養のため經典書写が行なわれた。しかし多大の経費と労力を必要とすることから、時代が下るに伴い、書写から印刷へと変容した摺供養が発生した。吾妻鏡にも書写供養の事例は、文治四年三月六日大般若経書写を始めとして数多くあるが、摺写供養の事例が比較的少ないことは、鎌倉時代がまだ書写の時代であったことを裏書きするものである。
- (21) 前掲の鎌倉における開板事業一覧参照
- (22) 玉村竹二氏・井上禅定氏「円覚寺史」七九頁に、北条貞顕追善のために、公家風の一品経供養が行なわれ、貞時十三回忌に法華八講が執行されていることは、北条氏の行なう仏事が案外に復古的京都風であることが知られて注目に値するとある。

- ㉓ 吾妻鏡建長四年九月三十日沽酒の禁令において、民家の酒壺数 37274 口あったことはその一斑を示すものであろう。
- ㉔ 吾妻鏡寛元三年四月廿一日五ヶ条の禁制。宝治二年四月廿九日鎌倉中の商人の式数を定む。建長三年十二月三日商店の地域を制限。建長五年十月十一日燃料と馬の飼料について公定価格を定む。文永二年三月五日商店の制限令。
- ㉕ 前者は金沢文庫古文書第 5432 号、後者は鎌倉市史史料篇 第 3・283 号
- ㉖㉗ 拙著「鎌倉の教学」16 頁および 25 頁の智照行実一覧表参照
- ㉘ 東福寺文書之 1・20 号、木宮泰彦氏 日本古印刷文化史 177 頁参照
- ㉙ 木宮泰彦氏「日本古印刷文化史」179 頁参照

(附記)

禅籍の開板については玉村竹二・井上禅定氏「円覚寺史」168頁 以下に詳しく論ぜられているから参照されたい。